

付章 資料紹介八幡沖遺跡隣接地採集の土師器甕

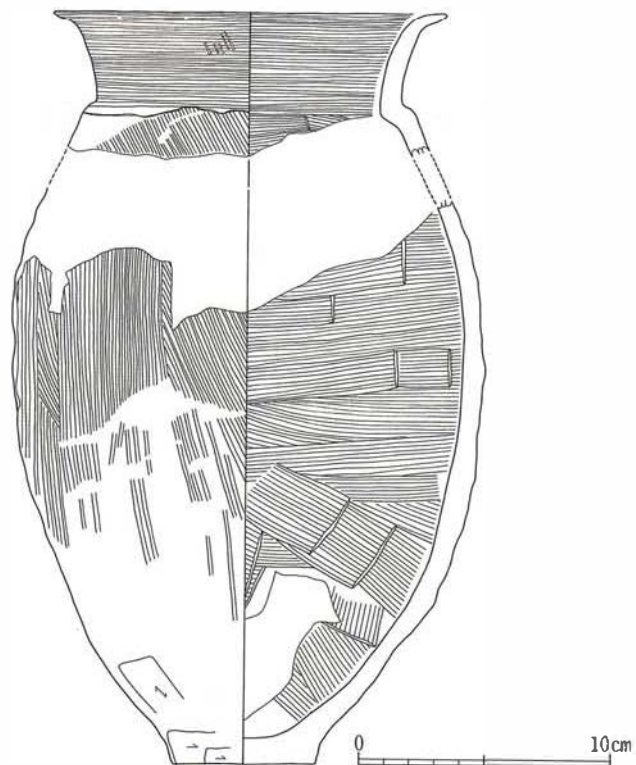
本資料は、八幡沖遺跡第3次調査区の北西約350m、仙台市宮城野区中野字資田の県道塩竈・亘理線脇の用水路掘削（1986年）の際、出土したものである。当時、多賀城市立八幡小学校教諭であった鈴木久夫氏（故人）が採集し、保管していたものを多賀城市埋蔵文化財調査センターが預り、今日に至っている。現在、出土地点は水田となっており、遺物の散布はみられない（第1図）。

土師器甕（第2図）は、いわゆる長胴甕で、口縁部の約1/3、頸部及び胴部・底部の一部を欠くが、全容を窺い知ることができる。推定口径15.6cm、推定底径5.7cm、器高は頸部と体部の接点がないため不明だが約30cmと推定した。頸部は直立気味に立ち上がり口縁部は外反している。頸部と体部の境には明瞭な段があり、底部には木葉痕が残る。器面調整は、外面は口縁部から頸部にかけてはハケメのちヨコナデ、体部はハケメ、底部に近い部分にはヘラケズリがみられる。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部はヘラナデが施される。胎土は緻密で、石英粒を少量含む。焼成は良好で、色調は10Y R7/2(にぶい黄橙色)を呈し、体部には黒斑が認められる。年代は、概ね古墳時代後期、氏家和典氏が型式設定した栗罎式の範疇で捉えられる。

八幡沖遺跡では、これまで平安時代およびそれ以降の遺構が発見されているが、古墳時代後期の遺構も存在している可能性がある。



第1図 土器出土地点位置図



第2図 出土遺物